「思ひ立つ」召人
――『和泉式部日記』における〈女〉の主体性――

加藤和泉

はじめに

平安時代の日記は、作者が過ぎ去った自己の生活を改めて振り返り書くものである。それは、執筆する時点で過去の自分を評価し、整理して意味付けをし、構成しなければいけない。また、日記を読まれる筆者にごく近しい他者を意識するために、自己の行いを弁護するという働きも生まれる。これらの要素から考えると、筆者は日記を書くにあたり、自己をかなり客観視しなければならない。さらに、『和泉式部日記』の特性として最も代表的な第三人称語りは、過去の自己を、第三者としてつきはなして語っているということになる。それは、言葉をかえて言えば、自己への客観視を貫いているということになる。[1]

この作品は、流される〈女〉を語っているようでいて、〈女〉の独自の決断も大事に語っている。身分が宮よりも低いので、宮の言いなりになるのではなく、身分が低いなりにじっくり考えぬいた末の結論であるように、実は書かれている。小論では、〈女〉が宮邸へ入る際に「ある事をしようという考えを起こす・発起する・決意する・決心する」という意で用いられる「思ひ立つ」という語に注目したい。他の場面においても〈女〉や宮が「決心する」場面はあるのであるが、あえて宮邸入りの場面で「思ひ立つ」が用いられているのである。

その語りの効果に注目し、〈女〉がどのように語られるのか、どのような〈女〉として表現されるのかを考えていきたい。

一　「忍ぶ」恋の関係

この日記の主題については様々な論があるが、クライマックスと言える場面は、人々から好色というレッテルを貼られている〈女〉が、北の方のいる帥宮の邸へ召人として入っていく場面ではないだろうか。この過程において〈女〉が堂々と宮の元へ行くことが出来なかったのは、〈女〉は宮の兄である為尊親王との世間を憚る過去の関係があり、その上に、さまざまな男との並行的な関係があったためである。その関係が宮の周囲だけでなく世間から、危険人物である好色な女として見なされていた。〈女〉にはそうした評判が付き纏っているのにも関わらず、宮は翻弄されながらも、〈女〉と関係を結ぼうと働きかけるのだ。この二人の関係において、当初「忍」ばなければならない問題があることに注目したい。

この二人の「忍」ばなければならない関係は、二人の歌の贈答に

も見られるが、宮の乳母である侍従の提案がその関係を露骨に示している。それは、「人々あまた来かよふ」〈女〉のもとへ足しげく通う宮の立場を気遣い、「（〈女〉を）召してこそは使はせたまはめ」と提案したことである。この乳母は、宮の兄である為尊親王と〈女〉の関係をも事細かに把握しており、「すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがし始むることなり。故宮をもこれこそゐて歩きたてまつりしか。」と、引き合いに出し、〈女〉の家へ出かけようとする宮を止めようと働きかけている。ここで、乳母は二人の関係が「忍」ばなければならない関係であるのを前提に、宮にとって〈女〉が召人であれば体裁が保たれるということを促しているのである。つまり、乳母の発言は、二人は恋人という対等な関係ではなく、あくまでも二人を主人と召人という主従関係に置くことで落ち着かせようというものだ。この発言からも分かるように、召人は、〈女〉の立場からだけでなく、社会に流通しているイメージが一人の男と女の関係よりも男女間にとって不対等であることが読み取れ、そうした主従関係の下であれば納得出来る要素があるということだ。

では、この乳母からの提案を受けた宮の反応について乳母が召人待遇を促した辺りから、本文を挙げて考察していきたい。

おはしまさむとおぼしめして、薫物などせさせたまふほどに、侍従の乳母まうのぼりて、乳母「出でさせたまふはいづちぞ。このこと人々申すなるは。なにのやうごとなききはにもあらず。使はせたまはむとおぼしめさむかぎりは、召してこそ使はせたまはめ。かろがろしき御歩きは、いと見苦しきことなり。そがなかにも、人々あまた来かよふ所なり。便なきことも出でまで来なむ。すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがし始むることなり。故宮をも、これこそゐて歩きたてまつりしか。夜夜中と歩かせたまひては、よきことやはある。かかる御供に歩かむ人は、大殿にも申さむ。世の中は今日明日とも知らず変はりぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを、世の中御覧じはつるまでは、かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」と聞こえたまへば、宮「いづちか行かむ。つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ。ことごとしう人は言ふべきにもあらず」とばかりのたまひて、「あやしうすげなきものにこそあれ、さるは、いと口惜しうなどはあらぬものにこそあれ。呼びてやおきたらまし」とおぼせど、さてもまして聞きにくくぞあらむ、とおぼし乱るるほどに、おぼつかなうなりぬ。（三〇）

乳母の〈女〉を召人にするという提案（波線部）と、〈女〉の好色である世評（二重線部）を聞いた宮は、〈女〉に対して「あやしうすげなきものにこそあれ。呼びてやおきたらまし」という感情を抱き、ここで初めて〈女〉を自邸に入れるという選択肢が生じている。だが、〈女〉への好色という噂がその選択をすることを邪魔し、宮は結局世間体を優先し、〈女〉の元へ足が遠のいてしまったのである。

こうした女房らの注意によって、当初からあった〈女〉に対する好色な噂が確実なものとなり、宮は〈女〉に対する見方を変えていくのだが、次の場面で宮のこれまでとは異なる大胆な言動に注目したい。

からうじておはしまして、宮「あさましく、心よりはかにおぼつかなくなりぬるを、おろかになおぼしそ。御あやまちとなむ思ふ。かく参り来ること便悪しと思ふ（A）人々、あまたあるや

うに聞けば、いとほしくなむ。大方もつつましきうちに、いとどほどへぬる」とまめやかに御物語したまひて、宮「いざたまへ、今宵ばかり。（B）人も見ぬ所あり。心のどかにものなども聞こえむ」とて車をさし寄せて、ただ乗せに乗せたまへば、われにもあらで乗りぬ。（C）人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけにければ、知る（D）人もなし。やをら（E）人もなき廊にさし寄せて、下りさせたまひぬ。月もいと明ければ、「下りね」としひてのたまへば、あさましきやうにて下りぬ。宮「さりや。（F）人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてを聞こえむ。（G）人などのある折にやと思へば、つつましう」など物語あはれにしたまひて、明けぬれば、車寄せて乗せたまひて、宮「御送りにも参るべけれど、明るくなりぬべければ、ほかにありと（H）人の見むもあいなくなむ」とて、とどまらせたまひぬ。

女、道すがら、「あやしの歩きや。（I）人いかに思はむ」と思ふ。（三一）

（以下略）

この場面は先の場面において、宮が〈女〉の元へ「おはしまさむとおぼしめして」支度をしていたところ、乳母によって止められてから「おぼつかな」くなり、乳母の目を盗んで「からうじて」赴いた場面である。宮は乳母や周囲からどれだけ〈女〉への注意を聞かされても、「からうじて」やって来る感情を、〈女〉に対して抱いているのである。しかし、この場面において宮は、乳母からの忠告を受け、〈女〉の扱いを一変させている。それはまるで人攫いの様に〈女〉を人目に付かないように連れ出していくのだ。「ただ乗せに乗せたまへば」とか「『下りね』としひてのたまへば」のような強引な対応は、これまでに無かった扱いである。こうした態度は、周囲から受けた注意によって明らかに〈女〉の好色さを踏まえたものと考えられる。

さらに、〈女〉との関係において、これまで以上に「人」目を意識していることにも注目したい。その証拠に本文では一場面中に「人」という語が九回用いられている。特に宮の発言を見ると、あえて他の人という意味の「人」を用いて、人がどういう風に思うとか、どう見られているということを強調している。そこでこの場面の中から、宮の「人」目を意識した表現が見受けられる箇所を一覧表にまとめた。

	人（主体）	客体	主体からの判断を受けた動揺
A	人々	参り来ること	便悪しと思ふ→いとほしくなむ・まめやかに
B	人	二人の密会	人も見ぬ→心のどかにものなども聞こえむ
C	人	二人の密会	（仮定）思ふ思ふ行けば
D	人	二人の密会	知る人もなし→（推測）安心
E	人	二人の密会場	人もなき→やをら
F	人	二人の密会場	人もなき所→（提案する）今よりはかやうにてを聞こえむ
G	人	二人の密会	（仮定）人などのある折にやと思へば→つつましう
H	人	宮	ほかにあり→あいなくなむ・とどまらせたまひぬ
I	人	あやしの歩きをする〈女〉	人いかに思はむ→宮の姿を思い出す

こうした人目を気にした宮の対応によって、二人の関係は「忍ぶ」ことが必須となっていくのである。

この二人の関係について出会いから振り返っていくと、「忍び」というキーワード以前に、宮が故宮と兄弟である繋がりから「ほととぎす」という歌ことばを用いていたことを確認しておきたい。

女①　薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると　（十八）

宮①　おなじ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずや　（十九）

女②　ほととぎす世にかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日もすぎなば　（二四）

宮②　忍び音は苦しきものをほととぎす木高き声を今日よりは聞け　（二四）

〈女〉は、宮を「ほととぎす」に見立て、兄宮と同じ声かどうかを聞いてみたいという名目を立て、会いたいという意思表示を〈女〉から投げ掛ける。二人は、〈女〉の亡くなった恋人の兄弟という繋がりからどのような人か会ってみたいという好奇心に変化し、やがて恋人関係になった。その関係は「忍び」を必要としたが、その「忍ぶ」関係を逸脱したいという地点にまで発展していったのである。

このように、二人の関係は段階を経て進展していくのだが、「忍」ばなければいけないという問題は、容易に解決しなかった。次のステップへと進めることは困難だったのである。右記の〈女〉の「ほととぎす世にかくれたる」の歌において、〈女〉は「忍」ばなければならない二人の関係を、五月になると公然と鳴くほととぎすに重ね、そこに多少の皮肉を込めて、思いを訴えている。宮はその歌を受けて、〈女〉からほととぎすと見立てられたその意図を理解する。そして、これからは堂々と会いに行くという意味の返歌（「ほととぎす木高き声を今日よりは聞け」）をするが、この歌を詠んだ後に、〈女〉の元へ会いに行く際、「忍びてわた」るのである。

（宮）忍び音は苦しきものをほととぎす木高き声を今日よりは聞け

とて、二三日ありて、忍びてわたらせたまへり。（中略）

（宮）過ぐすをも忘れやするとほどふればいと恋しさに今日は負けなむ

あさからぬ心のほどを、さりとも」とある、御返り、

（女）まくるとも見えぬものから玉かづら問ふひとすぢもたえまがちにて

と聞こえたり。

宮、例の忍びておはしまいたり。　（二四）

しかし、〈女〉はこの矛盾した宮の態度を非難することはしない。つまり、〈女〉は二人の仲を公然とすることを望んでいたものの、初めから実現できないことを理解した上で詠んだのである。今後、二人の関係を公然としようなどというのは、あくまでも歌の中の歌ことば表現に思いを便乗させてその意味を提示したに過ぎず、宮が実際は「忍びてわた」ってきたことは責められないのである。こうしたやり取り、つまり「五月待つほととぎす」に準えて二人の仲を公然としようと努めた歌の中でのやり取りは、実現出来ないからこそ、より一層二人の「忍ぶ」関係をキーワード化したように考えられる。さらにその直後にも、宮が「忍」んで〈女〉の元へ訪れた様子が記されるが、「宮、例の忍びておはしまいたり」とあり、「忍」んで来

ることが、二人の間において通例となっているのである。[2]

しかし、こうした二人の「忍ぶ」仲において、大きな進展が見られる。それは宮の〈女〉を召人として自邸に呼び寄せるという気持ちの変化である。宮は〈女〉に対して歌の中では公然としようということを示すことができた。しかし、実際宮にとって〈女〉との中を公表するには、身分や制度というような宮自身の立場を保証している社会を、捨てなければいけないという覚悟と、その覚悟を固めさせる自信がなければならなかった。宮が〈女〉との関係を公然とするためにこのような危険を負うには、〈女〉に対する確かな信用が必要である。

だが、たとえ〈女〉に、身に覚えがない「よしなきこと」であったとしても、噂の中で「便なげ」（不都合である）とか「人々あまた来かよふ」などと世間から思われている以上、宮はこうした評判を乗り越えて〈女〉自身の内面を知らなければならなかった。

①月は曇り曇り、しぐるるほどなり。わざとあはれなることのかぎりをつくり出でたるやうなるに、思ひ乱るる心地はいとそぞろ寒きに、宮も御覧じて、「人の便なげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここに、かくて、あるよ」などおぼす。あはれにおぼされて、女寝たるやうにて思ひ乱れて臥したるを、おしおどろかせたまひて、

（宮）時雨にも露にもあてで寝たる夜をあやしく濡るる手枕の袖

とのたまへど、よろづにもののみわりなくおぼえて、御いらへすべき心地もせねば、ものも聞こえで、ただ月かげに涙の落つるを、あはれと御覧じて、「などいらへもしたまはぬ。はかなきこと聞こゆるも、心づきなげにこそおぼしたれ。いとほしく」とのたまはすれば、「いかにはべるにか、心地のかき乱る心地のみして。耳にはとまらぬにしもはべらず。よし見たまへ、手枕の袖忘れはべる折やはべる」とたはぶれごとに言ひなして、あはれなりつる夜の気色も、かくのみ言ふほどにや。

頼もしき人もなきなめりかしと心苦しくおぼして、（以下略）（五三）

②一夜の空の気色のあはれに見えしかば、心からにや、それよりのち心苦しとおぼされて、しばしばおはしまして、有様など御覧じもてゆくに、世に慣れたる人にはあらず、ただいとものはかなげに見ゆるも、いと心苦しくおぼされて、あはれに語らはせたまふに、「いとかくつれづれにながめたまふらむを。思ひおきたることなけれど、ただおはせかし。世の人も便なげに言ふなり。ときどき参ればにや、見ゆることもなけれど、それも人のいと聞きにくく言ふに、またたびたび帰るほどの心地のわりなかりしも、人げなくおぼえなどせしかば、いかにせましと思ふ折々もあれど、古めかしき心なればにや、聞こえ絶えむことのいとあはれにおぼえて。さりとて、かくのみはえ参り来まじきを、まことに、聞くことのありて制することなどあらば、『空行く月』にもあらむ。もしのたまふさまなるつれづれならば、かしこへはおはしましなむや。（五五）

この場面は、宮が初めて〈女〉に自邸入りの話を切り出すシーンである。ここで、宮はそれまで抱いていた〈女〉に対する偏見と実際

の差異に気が付くのである。そうした経緯は、〈女〉に「頼もしき人」がいないこと、そして〈女〉が「世に慣れた」人ではないということを、宮が確かめていくことであった。その確認方法は、宮が〈女〉の内面と向き合っていく上で掴んだ信頼関係である。だからこそ、この場面には、「あはれ」という語が何度も繰り返し用いられている。これまでと確実に変化しているのは、宮が〈女〉自身を見た際に「あはれ」と感じていることである。そうして〈女〉に「あはれ」を抱いた宮が切り出していくのが、自邸に迎えるということである。宮は、「ただおはせかし」とか「かしこへはおはしましなむや」という言葉で〈女〉を誘っている。

もちろん、宮のこうした発案は、乳母が促した「召してこそ使はせたまはめ」によるものが大きい。しかし、乳母が〈女〉を召人として宮の邸へ入れようとした、その場合の召人と、宮がこの場面で〈女〉を自邸へ入れようとした際の〈女〉の立場は、約五ヶ月の時間を経て意味が異なっている。乳母が〈女〉を召人にと提案したのは、五月の初めである。そして、この場面は十月中旬だ。この期間に、宮は周囲からもたらされた〈女〉の好色な噂を、〈女〉の内面と向き合うことで排除し、乳母の助言とは異なる経緯で召人として〈女〉を招き入れるのである。

この〈女〉を召人にして招き入れるという行為は、外形的に言えば、乳母の判断を受け入れて世間的判断に妥協したように見られるが、内面的には、お互いの理解を前提とした対等な関係を築いたということである。それは、社会的に召人と位置付けられる概念や制度そして身分を、二人で逸脱したと言っていいだろう。つまり、〈女〉は宮の乳母によっていわゆる予告された召人であった。しかし、〈女〉と宮は二人で世間の非難や人目を跳ね返す論理を見出していくことで、〈女〉の召人という立場を肯定していったのである。宮と〈女〉は、〈女〉が宮の召人になることで、内面的に価値ある関係として構築したのである。

二　「思ひ立つ」にみられる決意

これより、先に述べた、二人で見出していった宮邸入りの論理を述べていきたい。宮が初めて〈女〉を自邸に入ることを誘った場面では、〈女〉はその突然の宮の誘いに困惑するが、「なにかは、さてもこころみむかし」と前向きに受け入れている。そして、宮の正妻である北の方がいる邸に入ることに対しては、

北の方はおはすれど、ただ御方々にてのみこそ、よろづのことはただ御乳母のみこそすなれ。顕証にて出でひろめかばこそあらめ、さるべきかくれなどにあらむには、なでうことかあらむ。この濡れ衣はさりとも着やみなむ。　（五六）

と思い、あまり問題にせず、むしろ宮邸に入ることで、自分に向けられた他に男がいるという疑いを晴らせることに重点を置いている。この場面において重要なのは、誘った側の宮よりも、受身である誘われた側の〈女〉に積極性が見受けられるということなのである。もちろん、宮は誘う前提として、先に述べた通り、〈女〉に対する信用が生まれたということはある。しかしながら、誘った宮は、その後〈女〉を「寝も寝られ」なくするような態度で接するのである。〈女〉は、宮からの誘いを受けて、宮への愛だけを頼りに邸へ入る決意をするのだから、この宮邸入りに重きを置いているのは〈女〉

側であると考えられる。誘う側の決意とそれを受ける側の決意は、比重が異なっているのである。

しかし、この二人の関係は、危機的状況に直面すると、その後必ず二人を結びつけるような出来事が起こる。[3] この場面で、〈女〉は宮邸入りをすることで、世間の噂の真っ向の種になるということを心配する。「よそにても見苦しきことに聞こえさすらむ。まして、まことなりけりと見はべらむなむかたはらいたく」、「人笑へにやあらむ」と述べている。だが、こうした不安はある「記憶」を思い起こすことで、解消されていく。それが「手枕の袖」である。

宮① 露むすぶ道のまにまに朝ぼらけ濡れてぞ来つる手枕の袖

この袖のことは、はかなきことなれど、おぼし忘れでのたまふもをかし。

女① 道芝の露におきゐる人によりわが手枕の袖もかはかず

女② 手枕の袖にも霜はおきてけり今朝うち見れば白妙にして

宮② つま恋ふとおき明かしつる霜なれば （五八）

宮③ 手枕の袖は忘れたまひにけるなめりかし

女③ 人知れず心にかけてしのぶるを忘るとや思ふ手枕の袖

宮③ もの言はでやみなましかばかけてだに思ひ出でまし や手枕の袖 （六〇）

二人は「手枕の袖」を再び思い起こし確認しあうことで、お互いの仲は固く結ばれたという信頼関係を築いたのだ。これらの歌の贈答により、〈女〉を自邸に住まわせたいという宮の感情が確かなものになっていく。〈女〉と宮は、二人で作った「記憶」を共有しているという確信が、宮邸に入るという決意を確かなものに変えていったのである。

その決意が見受けられるのは、その直後に用いられる「思ひ立つ」という語である。この「思ひ立つ」はこの作品において、それまで決意を促される場面はあったものの、「手枕の袖」を確認し合った後に宮邸入りを決意する、この場面にのみ登場している。「思ひ立つ」がこの場面に特定され、全九例用いられていることに注目したい。「思ひ立つ」を初めに用いたのは、宮が〈女〉に自邸へ入る決心を促す場面である。それまでは、「ただおはせかし」とか「かしこへはおはしましなむや」という誘いだったのだが、「はやおぼし立て」と決心を促したのである。左記にこれを含め、「思ひ立つ」の用例全九例を挙げる。

「思ひ立つ」の用例

① 宮 「この聞こえさせしさまに、はやおぼし立て。かかる歩きのつねにうひうひしうおぼゆるに、さりとて参らぬはおぼつかなければ、はかなき世の中に苦し」 （六二）

② 女 参りやしなましと思へど、なほつつましうてすがすがしうも思ひ立たず。 （六四）

③ 女 かばかりねんごろにかたじけなき御こころざしを、「見ず知らず心こはきさまにてもてなすべき。ここごとはさしもあらず」など思へば、参りなむと思ひ立つ。 （六八）

④ 女 「この宮仕へ本意にもあらず、厳の中こそ住ままほしけれ、また憂きこともあらばいかがせむ。いと心ならぬさまにこそ思ひ言はめ。なほかくてや過ぎなまし。近くて親はらからの御有様も見きこえ、また昔のやうにも見ゆる人の上をも見さだめむ」と思ひ立ちにたれば、

（以下略）　（六九）

⑤　女　「思ひ立つことさへほの聞きつる人もあべかめりつるを、をこなる目をも見るべかめるかな」　（六九）

⑥　宮　「思ふことかなしくて過ぎにし一昨日と昨日と今日になるよしもがなと思へど、かひなくなむ。なほおぼしめし立て」　（七三）

⑦　女　いとつつましうて、すがすがしうも思ひ立たぬほどは、ただうちながめてのみ明かし暮らす。　（七三）

⑧　女　「あはれに、なにごとも聞こしめしうとまぬ御有様なれば、心のほども御覧ぜれれむとてこそ思ひも立て、かくては本意のままにもなりぬばかりぞかし」と思ふに悲しくて、（以下略）　（七七）

⑨　女　なにの頼もしきことならねど、つれづれのなぐさめに思ひ立ちつるを、さらにいかにせましなど思ひ乱れて、聞こゆ。　（七八）

①は、宮が「しばしうち臥」して〈女〉を自邸に呼び寄せる決心をし、〈女〉に「はやおぼし立て」と誘う場面である。この時、宮の〈女〉を誘う決心は強調されてはいない。宮は自分の決断よりも、〈女〉に決心を促すことを強調しているのだ。また、宮から「はやおぼし立て」と言われる前に、以前宮から誘われたことを思い出して〈女〉が自ら宮邸へ入る決心を態度で示していることも注目したい。それが①の直前に記せられる「（宮の邸へ）のたまふさまにもあらば、恥きこえさせてやはあらむずるとて、ねざり出でぬ。」である。宮は〈女〉のこの恥じらいや小さなことを気にしない強い態度を受けて、〈女〉に決心を施すのである。そして②では、それを受けた〈女〉のためらう思惟が描かれている。〈女〉は、「参りやしなましと思」うのだが、「なほつつましうてすがすがしうも思ひ立たず」と自分の中で宮邸に行くことを、思い立ちながらもそれをなかなか決断出来ずにいる。①の場面では、はっきりとした態度で示していたのだが、この場面においては自問自答をしながら宮邸入りを躊躇しているのである。

しかし、③の場面で、〈女〉は宮邸入りすることをはっきりと決断する。それは、宮の「ねんごろにかたじけなき御こころざし」を感じ、外聞や噂など人目は「さしもあらず」と跳ね除けている。この時ついに〈女〉は宮との仲を邪魔する世間体を排除し、「参りなむ」と潔く召人を受け入れて宮邸入りを決意していたのである。だが、④では〈女〉は自身の身内を気にし、⑤では宮邸入りを固めた決心を後悔している。〈女〉は決断したものの、その後躊躇や後悔を繰り返している。そうして、時は流れていく。こうした状況の中、⑥において宮は、「なほおぼしめしたて」と決意を再度、強い言葉で促す。①（「はやおぼし立て」）においても同様だが、宮は〈女〉に対して決心を促す際「はや」とか「なほ」といった相手に焦燥を与えるような表現をしていることにも注目したい。宮は〈女〉には決断を迫るのだが、自身の決意は明確に伝えていないのだ。〈女〉にとってこうした宮の催促は、心の揺らぎを「すがすがしうも思ひ立」てないと②・⑦で繰り返し表現している。「思ひ立つ」という言葉の強さの裏には、後悔やためらいの動揺が渦巻いているのだ。

〈女〉は、宮邸入りをすることを、時に頼もしく思い、一方で重荷と感じているが、この繰り返しによって、徐々にその決心を固めていくのである。この「思ひ立つ」の用例の頻度は、両者が同じ言

葉を用いることで、宮邸入りの際に周囲の未解決の問題も同時に「思ひ立」たなければならいことを表している。

また、二人は「思ひ立つ」以後、「立つ」を用いた意識的な言葉で表現されている。

（女）「（前略）ことごとはさしもあらず」など思へば、参りなむと思ひ立つ。まめやかなることども言ふ人々もあれど、耳にも立たず。（六八）

〈女〉は、宮の「かたじけなき御こころざし」に胸を打たれ、障害など大したことはないと、宮邸入りを「思い立」っていく。そして、宮の邸へ入った際の忠告を促す人々に対して、それを耳に入れようとしない。

次に宮の歌を見てみたい。〈女〉が、

今の間に君来まさなむ恋しとて名もあるものをわれ行かむやは

と、恋しいけれども外聞を気にしているから、宮に今すぐに来いという歌を詠む。それに対して宮は、

君はさは名の立つことを思ひけり人からかかる心とぞ見る

これにぞ腹さへ立ちぬる」（七〇）

と、〈女〉が「名もあるものを」と詠んだのに対して「名が立つ」と言い、さらにそれに対して「腹が立つ」と言っている。[4]

後に、宮が出家を仄めかす場面では、

女はそののち、もののみあはれにおぼえ、嘆きのみせらる。とくいそぎ立ちたらましかばと思ふ。（七九）

と、早く邸に行けばよかったと後悔する。ここでは、「いそぎ立つ」の前に「とく」を付け、宮が出家を思う前に行けばよかったという、〈女〉の時間的な後悔を強調している。

「立つ」[5]には、以上にあげた語に関連する意味を探すと「出発する」、「作用、状態などが目立ってあらわれる」、「人に知られるようにする」、「気持ちを興奮させる」があり、多義の語である。「思ひ立つ」[6]は決意をする時に、自らの気持ちを意識的に奮い立たせていくという意を持つ。ゆえに、宮邸入りへの決意は、それを阻む障害を意識的に回避してきたといえるのではないだろうか。

〈女〉の「耳にも立たず」は、人の忠告を意識的に耳に入れようとせず、宮邸入りの決心を貫いていく。宮の「君はさは名の立つことを」の歌と、その後の「腹さへ立ちぬる」には、相手（〈女〉）が浮名の立つことを気にしているのではないかという心配に、感情を掻き立てている。宮の邸に入るという大胆な決断に、周囲の忠告を「耳にも立たず」にしようとした〈女〉が、宮との逢瀬には「名もあるもの」と気にする。宮はそうした「名の立つこと」を気にする〈女〉に腹を立てているのだ。宮の出家話の浮上では、〈女〉は宮邸入りを「思ひ立」った後、それをどうして「いそぎ立」たなかったのかということを後悔している。

宮邸入りの話が浮上してから、邸に入るまでの短い期間に、〈女〉と宮の様々な思いが入り乱れている。二人は宮邸に入るという決心を、「思ひ立つ」という語を用いながらも、なかなか決断し切れずにいる。だが、それを決心するために、意識的に二人の恋を阻む障害を跳ね除けている姿が窺えるのである。〈女〉は、周囲が〈女〉に促す注意を耳に入れないことで、自身の宮邸入りの決意を強いものと意識する。そして、宮は外聞を気にしている〈女〉に腹を立て

ることで、宮邸入りをする覚悟を確かなものにしようとしている。そして、宮の感情の起伏に、〈女〉は宮の気の変わらぬうちに、早く行動に移さなければならないという気持ちが湧き上がっている。

こうして、両者があえて意識する行為や感情の中に、〈女〉の宮邸入りの話は進んでいく。「思ひ立つ」ことで宮邸入りの話は進んでいくが、それを阻むものに対し、二人は強く意識している。この意識的に思われ、する行為が、〈女〉の宮邸入りを「思ひ立」つ決心につながっていると考える。

⑨にあるように、「思ひ立つ」決心は、〈女〉の「つれづれの慰め」のためだと最終的に意味づけられている。では、「つれづれ」の「慰め」とは何か。もう一度、作品を振り返ってみよう。

三　「つれづれ」の主体と意味変化

この作品には、「つれづれ」という語が随所に用いられている。作品の中で、「つれづれ」は総数十六例である。「つれづれ」[7]は、名詞では「物思いにふけること」、「寂寥感」、「退屈」などを意味し、副詞では「一つの状態に変化がないさま」、「一つの動作に集中したり念を入れたりたりするさま」という意味を持つ。〈女〉と宮の関係の中で、いたるところに表れる「つれづれ」が、どのように用いられているのか。そして、その「つれづれ」がどう変化していくのかを、最後に考えてみたい。

①「そのこととさぶらはでは、なれなれしきさまにやと、つつましうさぶらふうちに、日ごろは山寺にまかり歩きてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御かはりにも見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りてさぶらふ」と語る。（十七）

②もとも心深からぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきことも目とどまりて（以下略）（十九）

③かくて、しばしばのたまはする、御返りもときどき聞こえさす。つれづれもすこしなぐさむ心地して過ごす。（二〇）

④雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきながめに、世の中をいかになりぬるならむとつきせずながめて、「すきごとする人々はあまたあれど、身のあればこそ」と思ひて過ぐす。（二八）

⑤宮より「雨のつれづれはいかに」とて（以下略）（二八）

⑥宮「いづちか行かむ。つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ。ことごとしうは人は言ふべきにもあらず」（三一）

⑦宮も、言ふかひならず、つれづれの慰めにとおぼすに、（以下略）（三九）

⑧かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさむとて、石山に詣でて七日ばかりもあらむとて、詣でぬ。（四三）

⑨「いとかくつれづれにながめたまふらむを。思ひおきたることなけれど、ただおはせかし。（以下略）」（五五）

⑩もしのたまふさまなるつれづれならば、かしこへはおはしましなむや（五六）

⑪ありしよりはときどきおはしましなどすれば、こよなくつれづれも慰む心地す。（六四）

⑫心のどかに御物語起き臥し聞こえて、つれづれもまぎるれば、

参りなまほしきに、御物忌み過ぎぬれば、例の所に帰りて、今日はつねよりもなごり恋しう思ひ出でられて、わりなくおぼゆれば、聞こゆ。（七二）

⑬つれづれと今日数ゆれば年月の昨日ぞものは思はざりける（七三）

⑭なにのたのもしきことならねど、つれづれのなぐさめに思ひ立ちつるを、さらにいかにせましなど思ひ乱れて、聞こゆ。（七八）

⑮「いでや、冬の夜の目さへ氷にとぢられて明かしがたきを明かしつるかな」

など言ふほどに、例のつれづれなぐさめて過ぐすぞ、いとはかなきや。（八一）

⑯暮れぬれば、ことはてて宮入らせたまひぬ。御送りに上達部数をつくしてゐたまひて、御遊びあり。いとをかしきにもつれづれなりしふる里まず思ひ出でらる。（八五）

①は、この作品の冒頭場面である。故宮に仕えていた小舎人童が、〈女〉のもとに訪れた際に述べた発言である。小舎人童は、為尊親王亡き後、頼るあてもなく所在無く思っていた。そして故宮の代わりに、今は帥宮に仕えているということを告げたのである。

②は、宮から贈られた歌、「うち出ででもありにしものをなかなかに苦しきまでも嘆く今日かな」を受けた〈女〉の心理描写である。近藤みゆき氏は、ここで用いられるつれづれを以下の様に述べる。[8]

「つれづれ」は和泉式部の多用した語。発散を求めながらそのすべもなく、鬱屈した心を一人でもて余す状態をいう。女は近ごろ故宮を失って慣れぬ孤独の立場にある。

近藤氏の指摘を踏まえて、この場面の「つれづれ」を考えると、「発散を求めながらそのすべもなく、鬱屈した心を一人でもて余す状態」の〈女〉が、慣れない「つれづれ」の日々を送る中で、〈女〉の「鬱屈した心」を唯一満たすのが、宮とのやりとりであった。つまり、〈女〉の「つれづれ」は、宮との関係を始めるきっかけになったのである。

③は、先の場面の直後で、宮から〈女〉のもとへ頻繁に文が贈られるようになった頃のことである。〈女〉は宮との贈答で「つれづれ」を慰めている。だが、「つれづれ」を慰めるために宮へ返事をするのではない。宮とのやりとりのなかで、「つれづれ」の心が解消していく様に感じているのである。

④、⑤は、五月雨の「つれづれ」を描いた場面である。長雨が続いていて、宮からの訪れがない。そうした状況を〈女〉は「つれづれ」であると思っている。宮は、〈女〉のそうした状況を推測して、「雨のつれづれはいかに」と文を贈っている。これまで、〈女〉の「つれづれ」は、為尊親王に先立たれた孤独で厳しい日々を指すものであった。しかし、宮と出会い、関係を築いていく中で、〈女〉の「つれづれ」は、宮に会えない日々を指す様になったのである。「雨うち降りていとつれづれ」な心で過ごしているのは、長雨のせいで宮の訪れがないからなのである。

⑥は、宮が乳母から、〈女〉のもとへ行くのを止められた際に述べたものである。この「つれづれ」は、〈女〉のもとへ行く弁解に使われたものである。「つれづれ」な日々を紛らわすために〈女〉のもとへ行って、「はかなきすさびごと」をするというのである。藤岡忠美氏は、このことを「女とのことも軽い慰みにすぎぬ宮の弁解。」

と指摘している。[9] つまり、宮が乳母を納得させるには、〈女〉の存在は宮の「つれづれ」を紛らわすための「はかなきすさびごと」と言うより他なかったのである。

⑦は、宮が女房たちから〈女〉の多情な噂を聞く際、宮の心情に用いられた語である。宮は、周囲からの忠告によって、〈女〉へ不信感を募らせていく。だが、宮にとって〈女〉は不信を拭い切れない相手ではあるが、「言ふかひならず、つれづれの慰めに」と思っている。先に乳母に述べた弁解と、周囲の忠告によって、宮は〈女〉を「つれづれの慰め」として位置付けている。当初、〈女〉の「つれづれ」を気に掛けていた宮が、〈女〉への不信感によって自身の「つれづれの慰め」として位置付けている。「つれづれ」は変化しているのである。

⑧は、〈女〉が石山詣でに行く際の場面である。宮とのとりとめのないやりとりに情けなく思い、「つれづれ」を慰めようと石山寺に行こうと決める。宮との関係を続ける日々の中に「つれづれ」を感じ、石山詣でをして慰めようとするのである。ここに、〈女〉が「つれづれ」と感じるその対象の変化が窺えるのではないだろうか。ここでは、為尊親王亡き後に感じられた「つれづれ」はなく、宮との関係の中で生じた「つれづれ」である。宮と会えないという「つれづれ」も変化し、宮とのやりとりは〈女〉を満足させない。宮との関係を続ければ、〈女〉は世間からさらに厳しい目を向けられることとなる。それが返って、〈女〉を孤独へ追い込むこととなり、「つれづれ」を生じさせていく。このように変化しているのである。この場面で生じた「つれづれ」を慰めるために、〈女〉は石山詣へ行くのである。

⑨は、宮が〈女〉に自邸へ入るよう勧める場面である。〈女〉の多情な噂や、そこから募らせた不信感が障害となっていた宮にとって、ここで「つれづれ」を用いるのは、どのような意味があるのか。〈女〉に「いとかくつれづれにながめたまふらむを」と言う宮は、〈女〉に他に男がいないことを想定し、〈女〉の状況を「つれづれ」としている。藤岡氏は、「宮は女の男関係を否定的に想像している。」と述べる。[10] 宮が想像する〈女〉の「つれづれ」は男の存在がいないことで生じる所在無さである。宮は〈女〉の「つれづれ」を想像することが出来たから、自邸へ入ることを勧めたのである。

⑩も、⑨と同様に宮が〈女〉を自邸へ誘う場面である。「もしのたまふさまなるつれづれならば、かしこへはおはしましなむや。」と言い、〈女〉に「つれづれ」であるならばと前置きして、邸へ入るよう誘っている。〈女〉の「つれづれ」はこの作品の始めから用いられており、「つれづれ」と感じない日々はなかった。しかし、宮が〈女〉を自邸へ入れようと思い切るには、〈女〉に別の男がいない「つれづれ」を想像することが必要なのである。

⑪は、〈女〉の「つれづれ」である。宮から邸へ入るよう勧められた〈女〉は、宮と和歌を贈答し、宮への気持ちを高めていくことで、「つれづれ」が満たされていく。この時の「つれづれ」は、これまで〈女〉が宮との関係に抱いていた不安ではないだろうか。宮から、自邸へ入るよう誘われても、なかなか決断出来ずにいる〈女〉が、宮と歌を贈答し、互いの気持ちを確認していくうちに、〈女〉の心に渦巻いていた不安が解消されていく。それが「こよなくつれづれも慰む心地す」に表現されている。

⑫、⑬も〈女〉の「つれづれ」を描いたものである。⑫では、宮

と「心のどかに御物語起き臥し聞こえ」ると、〈女〉の「つれづれ」は紛れる様子が描かれている。そして、その「つれづれ」を満たす思いにまかせて、「参りなもほしき」と宮邸入りを決めようとしている。⑬は宮と過ごした日々の幸福感を歌にし、贈ったものであるが、この「つれづれ」を藤岡氏は「宮と別れて独りきりの自分をもて余している状態が『つれづれ』に表現されている。」と指摘している。この状況において〈女〉の「つれづれ」は、「宮と別れて独りきりの自分をもて余している状態」なのであり、その「つれづれ」を味わいたくないから、宮邸入りを決心していく様子が窺える。

二人の関係は、当初宮の「つれづれのなぐさめ」に始まったのだが、宮邸に入る場面では、〈女〉の「つれづれのなぐさめ」として、その主体が変化している。〈女〉は宮との関係において、その問題を常に主体的に捉え行動していく。始めは、宮の好奇心の対象であり、「つれづれのなぐさめ」として扱われた〈女〉が、最後には自身の「なぐさめ」にと決意していく所に、〈女〉の側から、積極的に意味づけしていこうとする姿勢を窺うことが出来るのである。

おわりに

小論では、主人公である〈女〉が、運命に流されているようで、実は自己の生き方をその時その時で決断している〈女〉として造型されていることを、「思ひ立つ」という語に注目し考察してきた。この時代において、恋愛関係であった社会的に容認されない男女は、行きずりの一時的な関係で終わることが多く、万が一、恋が成就する場合でも、「男が女を盗む」というかたちで最後を迎えた。この作品の男女は、結果的には宮が〈女〉を召人という立場に落として自邸へと入れる。しかし、その過程を描いていく中に、〈女〉の方に決定権があり、〈女〉の煩悶の末の決断によって、宮邸入りがもたらされたとされているのだ。その中に〈女〉の主体性を大切にしていることが注目すべき点なのである。男に盗まれていく〈女〉は、この作品では、〈女〉側から盗まれていくのである。

この作品では、男が自分より身分の低い女を自邸に連れていく、という考えてみれば当然の帰結を引き伸ばして、宮と〈女〉を対等の立場として捉えている。お互いをどこまで信頼できたら宮邸に入るかということを大きな問題としているのである。

〈女〉と宮が「手枕の袖」を愛の証としてその絆を確認し合った翌朝、〈女〉は宮邸入りの誘いをうける。その十月半ばに受けた宮邸入りの勧めから、〈女〉が宮邸に入るのは十二月十八日である。その長く引き延ばされた時間の中で、互いに確かめられていったものこそ重要なのだ。この間の「思ひ立つ」の揺らぎに、〈女〉の主体性は鮮やかに浮かび上がる。

この作品は、男女が結ばれることそのものを興味の対象としたものではない。〈女〉が数々の逡巡の果てに宮邸入りへと「思ひ立」っていくその過程が、最後に重要な問題として捉えられた話なのである。

・本文は、新編日本古典文学全集『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』（小学館）による。

註

（1）『和泉式部物語』という題名と、伊藤博氏の述べる「作品内部にいわゆる物語的手法が包含されている」ことが相まって、「昭和初期から、『日記』は和泉式部自身の筆によるものではないという考えが提示されてきた」。しかし、近藤みゆき氏は、中世の『本朝書籍目録』、『古本説話集』に記載される「日記」の呼称、また『源氏物語』注釈書である『河海抄』が引用する「和泉式部伝」、『実隆公記』で実隆が写した『和泉式部日記』などを挙げ、中世になると、「物語」の書名が通行する一方で、「日記」の呼称も流通していたと指摘している。

他作説の研究としては、川瀬一馬氏の「和泉式部日記は藤原俊成の作」。また、阿部秋生氏の、第三者が執筆したものではないかという論である。さらに、今井卓爾氏は、「他の作品はほとんどすべて作中人物―主人公がすなわち著者であって、たとえ自己を第三人称にしたとしていても、その主人公が経験した世界のみを描いているのに、『和泉式部日記』にはそうした主人公の観点に対する統一がかけている。」と説いている。

しかし、自作説を訴える研究者の鈴木一雄氏らは、『和泉式部日記』は物語的叙述をみせるものの「どうしても和泉式部の作だと思わせる内実を持つ」と指摘している。さらに、近藤みゆき氏は、この作品の文体を指摘している。『蜻蛉日記』と共通する、「私語りの文体」助動詞「たり」が多く用いられていることを挙げ、そして、対極的に物語の文体（『竹取物語』や『伊勢物語』の基本文体）である「けり」を対照的に取り上げ、自作説を追究している。（木村正中「和泉式部日記主題の形成」秋山虔編『王朝女流日記必携』学燈社、一九八九年四月／近藤みゆき訳注『和泉式部日記』角川ソフィア文庫、二〇〇三年一二月）

（2）このことについて藤岡忠美氏は、以下のように指摘している。「強気な発言をしたにも関わらず、相も変わらず世人の目を忍んで通ってくる宮の姿が、滑稽感をともなって明示されている。『忍びて』というさりげない記述の中に、和歌と地の文が微妙に呼応しつつ進展してゆく、この日記の特殊な性質がのぞいていることを知る。」藤岡氏の指摘する、「特殊な性質」というものを、宮の矛盾した「忍びてわた」る行動に、またそれゆえに二人の関係性に「忍び」が強調されることを読み解くことができるのである。（藤岡忠美『和泉式部日記』解説「四　贈答歌と地の文」『日本古典文学全集』小学館、一九九四年九月）

（3）二人は、出逢いの場面からそうであった。「夢よりもはかなき世の中を嘆」いていた〈女〉のもとに、故宮に仕えていた小舎人童が来て、帥宮との関係を始めることで、〈女〉は再び世で生きる活力を得る。その後二人は恋愛関係を送る中で、宮が〈女〉の元へ訪れた際、それを〈女〉は気付かずに、〈女〉に付き纏う好色という噂も助け思わぬ疑惑を生んでしまう。しかし、〈女〉の石山詣でを契機に二人の仲は回復する。そして、またしても同様の事件が起こり、濡れ衣を着せられた〈女〉は再び憂えるが、宮からの代筆依頼や二人の愛の証である「手枕の袖」という記憶の共有を得て、二人の仲はより一層深まっていく。

（4）『日本国語大辞典』に、「気持ちを興奮させる」とある。

（5）『日本国語大辞典』による。

（6）注（5）に同じ。

（7）『日本国語大辞典』に、「一〔名〕一次から次へと物思いにふけること。ひとり寂しくはてしない物思い。二〔形動〕変化が無くて単調なさま。また、その結果、つまらないと思う精神状態をいう。①やるべき事がなくて、手持ち無沙汰なさま。所在ないさま。退屈。無聊。②何事もなく物寂しいさま。寂寥。二〔副〕①一つの状態、ことがら、動作などが、変化もなく中断もなく、長く続くさまを表す語。そのままずっと。②一つの動作に集中したり念を入れたりするさまを表す語。つくづく。つらつら。」と記される。

（8）近藤みゆき訳注『和泉式部日記』（角川ソフィア文庫、二〇〇三年一二月）の頭注に記載。

（9）藤岡忠美『日本古典文学全集26』（小学館、一九九四年九月）の頭注に記載。

（10）注（9）に同じ。